

らしんばん

緩和ケア病棟で創りだすハーモニー —消すことができない楽譜の書き込み—



新城拓也

社会保険神戸中央病院 緩和ケア病棟

手元には、1枚の写真があります。その写真には貴重な時間が止まったまま、Yさんと、そして僕が写っています。この写真を見る度に、Yさんと一緒に創り出した不思議な時間とハーモニーが、まだ昨日のこのように思い出されます。

僕は幼少の頃よりバイオリンを習いはじめ、大学でオーケストラ部に入り、勉強よりも音楽に打ち込んでいる医学生でした。それでもなんとか国家試験を終え、医師になってからも少ない時間を工面しながら、地元のアマチュアオーケストラで演奏活動が続けてきました。内科医として地域医療に専念したのちに、今の緩和ケア病棟へ転勤し、緩和医療に専念するようになって5年が過ぎようとしています。当初は、緩和ケア病棟での音楽活動はほとんどしませんでした。いや、しないようにしていました。というのも、素晴らしい志をもった音楽ボランティアの方々が、僕が病棟に来る前からよい音楽活動をしていましたし、僕は医療のことで精一杯でした。

しかし、今からちょうど2年前のある日、その禁を破ることとなりました。

Yさんはピアノの教師でとても多くの生徒さんを教える、演奏者としても指導者としても素晴らしい方でした。初めてお会いした日も、医師としての自分の役割をつい忘れて、「Yさんはどんな作曲家が好きなんですか?」と話し始めてしばらく時間を忘れて話し続けました。Yさんも「音楽の話ができて良かった」と言われ、お互いの距離がぐっと縮まった気がしました。しかし、Yさんはいくつかのつらい症状を抱えていて、毎日の暮らしの妨げとなっていました。そして病棟へ入院し、痛みと吐き気をオピオイドや制吐剤を工夫しながら治療しました。うまく薬物の治療が進み症状が緩和されると、ご主人と共に自宅へ外泊する日も増えてきました。

ちょうどその頃、なかなかバイオリンを演奏する場所と機会に恵まれず、合奏の楽しさを知っている僕はその機会を探していました。そして目の前にいるYさんに、思い切って提案してみたのです。「体調も良くなってきましたし、どうですか? 簡単な曲でも一緒に弾いてみませんか?」

実は、この提案にはとても勇気が必要でした。体調不良で自分が思った音が奏でられないことや、音楽の世界をうまく組み立てることができないことは、演奏家にとっては周囲が考えるよりもずっとつらいことです。音を通じて自分を表現することが病気のためにできない、そんな風に思わせるのではないか、演奏することでかえってつらい思いをされないか、と内心はとても心配していたのです。そこで演奏が容易で、構成の簡単な数分の曲をいくつか選び楽譜を見せてみました。

「いいですよ」Yさんは答えてくれました。そして、病棟のデイルームに置いてある、あまり上等とはいえないピアノで練習を始めて、入院中の新たな日課ができました。症状が落ち着き、体調も食欲も上向きになり、退院をする数日前に、デイルームで僕とYさんの二人で演奏会を開きました。観客はご主人ひとりです。



Yさんの演奏会
(ご主人<ご遺族>の承諾を得て掲載)

いくつかの曲を弾きながら、Yさんのピアノ演奏の音と波をうまくつかまえることができるように、僕は注意深くバイオリンを演奏し、お互いが慣れてくるとだんだんとハーモニーがひとりで広がっていきました。すると、その演奏を聞きつけた病棟に入院中の患者さんや付き添いのご家族がひとり、またひとり集まってきて、知らない間に多くの患者さんと家族に囲まれることとなりました。「やあ、先生が弾いていたんだ」と皆さんもとても楽しそうな一時で、普段は医師と患者の関係にある皆さんとも不思議な一体感でした。

Yさんは退院され、毎週金曜日の午後に来に来ていただくこととしました。午後の一番最後に来てもらうようにして、診察が終わったあとは、ご主人とYさん、僕の3人でデイルームに行き、毎週のように新しい曲を演奏し徐々にレパートリーも増えていきました。また、金曜日の夕方の一とときを患者さん達も知っていて、いつしか恒例のコンサートとなりました。僕も毎週Yさんと会えるのが、1週間の楽しみとなりました。

ある患者さんのご家族からリクエストをいただきました。そのリクエストに二人で演奏で応える。二人の演奏をご主人が静かな笑顔で見守り、多くの患者さんの心に届く。なんて素晴らしい体験でしょう。これほど素晴らしい音楽体験は今まで味わったことがありませんでした。演奏中は僕もYさんが患者であることすらすっかり忘れてしまい、あれやこれやと演奏についての意見や討論をするようになりました。

しかし、楽しい時間は長く続きません。がんは確かにYさんの生活を悪い方へ変えていき、外来通院となり2カ月を過ぎたある日、再入院となりました。

2回目の入院後もしばらくは一緒に演奏していたのですが、時々伴奏が乱れたり、うまく息を合わせることができない時がありました。病状が悪化していることを僕も医者としてよく分かっていましたので、できるかぎりの治療をしながら見守り続けました。演奏に誘うことも難しいなと思いながらも、そのことを話題にせず

時間が過ぎていきました。

時折、呼吸が乱れるようになったある日のことです。「先生、もう借りていた楽譜返します」と、ある日部屋で僕にYさんは静かに話し始めました。Yさんも自分の病状をよくご存じで、もう演奏することはないと確信されたのでしょう。また律儀なYさんのことですから僕の貸した楽譜を「ちゃんと返さない」と考えていたのかもしれませんが、自分自身で死期を予感しているYさんの真剣なまなざしとお言葉でしたが、僕は「いえいえ、まだ持っていてくださいよ。また弾ける日もあるでしょうし…」そんな風にしか答えることができませんでした。

楽譜を受け取ることでもう二度と演奏の機会がないことを確認し合う、また“そうです、僕もYさんの死期が迫っている気がします”というメッセージを、楽譜を受け取ることで伝えてしまうことになるなどと考えて、その時はどうしても楽譜を受け取ることができませんでした。

やはりその日以降、二人で演奏する日はやってきませんでした。亡くなった後にご家族から手渡された紙袋に入ったピアノの楽譜には、Yさんの書き込みがいくつか残っていました。それは演奏する曲に印がつけてあったり、演奏するときの注意書きのようなものです。その書き込みを今も見るたびに、Yさんと一緒に演奏した日のことや、今はもう会うことが出来ないコンサートを聴いていた多くの患者さんやそのご家族の方々の笑顔が、今も新鮮な記憶となって僕の心に浮かんできます。

二人で創りだしたハーモニーの尊さと医師と患者という関係を超えたYさんとの思い出は、消すことができない楽譜の書き込みとともに、これからも僕の心についてまでも残ることでしょう。

